

生涯と舞踊－日本の民俗舞踊をめぐって

吉川周平

1 日本伝統芸能と舞踊

日本においては、近代以前には「舞踊」という語は使用されず、伝統芸能は「舞」あるいは「踊り」と結びつけられていた。つまり、日本の伝統芸能は、舞踊ではないものもあるが、舞楽・能・神楽などは「舞」で、歌舞伎は「踊り」というように、大別されていた。

2 古典舞踊と民族舞踊

日本の伝統芸能のなかの舞踊とされるものを、伝統舞踊ということにすると、専門家による古典舞踊と、芸能を職業としない人による民俗的な舞踊とに大別される。「民俗」という言葉には問題もあるが、古典舞踊でないものを「民俗舞踊」ということにして、日本の民俗舞踊を、伝承者と享受者の生涯とのかかわりから考えてみたい。

3 学校による欧化教育と地域社会による伝統文化の教育

先に述べたように、日本の伝統芸能は舞踊を重要な要素としていても、歌やその他の要素を含んでいる。明治以後、小学校から大学までの学校教育では、国民を近代化する欧化教育を進めてきたが、学校の外ではおもに祭にともなう芸能の上演のために、日本的・アジア的な芸能文化が、主として共同体で組織的に教育され、伝承されてきた。

日本の民俗芸能は祭のなかで上演されてきたために、伝承は保守的な姿勢で、先人が行ったかたちを尊重し、学(まな)ぶという語の原義である「まねる」ことを徹底的に仕込まれた。

芸能のもっとも主要な要素は、身体動作のかたちである。とりわけ、伝統舞踊は身体動作のかたちが伝承されていなければ、上演できない。そこで、その身体動作のかたちの伝承は、地域のなかで厳しく行われてきたが、学校のなかではとりあげられることがなかった。日本人が長い時間をかけて達成していた身体文化が、民俗芸能の伝承を通して社会教育されてきた事実を目を向けなくてはならない。

これは舞踊の面だけではなく、音楽においても同様で、日本語にあう歌い方、発声法も伝統芸能の教習を通して伝承されてきた。

音楽や舞踊の面で、学校教育とは異なる文化が伝承できたのは、学校外の社会教育の方が、学校教育の開始よりも年齢的に早く始まり、老齢に至るまで関係することが多いからで、文字通り身に付くからである。

4 姫島の島民の生涯と盆踊り

民俗芸能、民俗舞踊は、先に述べたように、身体動作のかたちの伝承があって、はじめて上演が可能になる。

ここで、大分県東国東郡姫島村の盆踊りを1例にあげて、姫島村の島民と盆踊りの関わりについて検討してみよう。

盆踊りは日本の民俗舞踊のなかで、もっとも広く分布している舞踊である。そこで、そのかたち、振りはいろいろである。姫島の盆踊りのひとつの特色は、ナカオドリと外側の踊りの2重の輪で踊られることである。ナカオドリは内側、つまり中側の踊りで、主として老人が踊る地味な振りの踊りだが、1度踊り始めると、盆踊りが終了するまでは、踊り手が交代することはあっても、ナカオドリの輪は中断されない。

一方、外側の踊りは毎年多くの新作踊りをまじえて、次々と来る踊り組により激しく踊られる。

姫島の盆踊りは浮き立つ気分が満ちあふれている。各地の盆踊りは、政府によって、風俗を乱すといった理由で禁止されることが多く、浮き立つ気分が失われてしまった所も多い。この浮き立つ気分は、若い男女が踊りを競うところから生まれてくる。

姫島の盆踊りは、小学生以上が踊りに参加できる。漁業を行う島で、今でも青年の組織が健在で、盆踊りを主催するのは青年である。この青年の組織は葬式の仕事も担当する。姫島の盆踊りは、西部、中部、東部の3地区に分かれて行われてきた。西部地区は、本村といわれ、人口も多く、4区に分かれている。盆踊りは、この4区の各区の盆ツボといわれる踊り場と、忠魂碑のある中央広場で踊られるが、外側の踊りは、小・中学生の踊りの組をのぞき、区のなかの人によって、秘密のうちに組織され、盆踊りの当日までそれぞれの区で、衣裳や小道具を作り、踊りの稽古をする。

小学生以上になると、こうした外側の踊りを組織することができるが、先に述べたように、青年男女の踊りが中心で、現地の言葉で「ゲサク」な踊りが好まれる。つまり、上品なものではなく、泥くささをいとわない、生命力にあふれた踊りが求められている。

浮き立つ気分とは、性的なかおりをとまなうもので、エロティックな声、扮装、動作が重要な要素であり、躍動的に踊らねばならない。

青年は15歳から25歳の未婚の者が中心で、その年齢を超えると、中口ウといわれ、踊りは少しお

だやかで、より技巧的な、踊りの技術を見せる手踊りを担当するようになる。そのひとつの『九つ拍子』の踊りは、普通の浴衣に、顔を隠す編笠をかぶって、手振り美しく踊る踊りになっている。

姫島の盆踊りでは、このように年齢によって、踊りの種類が異なる。そして、中口の踊りも踊れなくなると、ナカオドリを分担し、たんたんと踊り、音頭出しの歌にあわせて、歌も歌う。

そして、足、腰に痛みを感じて、ナカオドリですら踊れなくなった人たちは、盆踊りの太鼓に誘われて盆ツボに来て、踊りの周囲で見物するようになる。つまり、姫島の盆踊りは、幼児をのぞき、全員が踊りに参加すべきもので、踊れなくなった人たちが見物人となっている。

姫島の盆踊りは、昭和40年代になってからそれまで旧暦の7月の盆に行っていたのを、新暦の8月の盆に行くようになった。14日から盆踊りを始め、16日がもっとも盛大であるが、17日は供養盆といって、盆ツボに初盆の人の霊を表象する切子灯籠を持参する。戸主らは正装して、それを拝み、列席する遺族に挨拶する。この日は子供たちを中心とした踊りが少し行われるだけだが、姫島では、踊れなくなった見物人は、やがて、死後切子灯籠のかたちで、盆踊りの場に臨場し、元は18日の朝その灯籠は海岸に運ばれ焼却された。

16日までの盆ツボに集まった見物人にたずねると、自分たちも踊っていたころを思い出すと答える。そして、一緒に踊っていた亡き人のことを思い、やがて来る自分の死についても考えるように見受けられた。

私は、盆踊りは、人の死とたたかう場であり、盆踊りの夜は性の解放すら容認されたのも、1人死ねば1人生めばよいとの思いによると考える。死者の霊のために人びとが盛大に踊っているのを、物心がついてから毎年見ることにより、死を怖れずに、安らかに迎え入れることができるようになるのではないだろうか。

以上のようにみえてくると、姫島の盆踊りの場においては、踊り手が足や手の振りを、伝統の身体動作のかたを学ぶことによって、舞踊の技術を伝承しているばかりではない。それを見物する人間、言葉をかえると、その踊りの享受者は、その盆踊りの本来の意味を感じとり、意識をしなくとも、共同体のなかで生き、死を迎える態度を学習することになるのではないかと考えられる。

このようなことは、学校教育のなかでは自然に学ぶことはできない。

盆踊りは1種類のひとくさりの動作をくりかえすだけで、1曲が成り立っている単純な舞踊である。日本の伝統舞踊のなかでも、もっともやさしい舞踊である。しかし、ここでは詳述できないが、姫島の盆踊りにみられる身体動作のかたちと、無

意識のうちに伝承されている本来の意味は、他の地域の盆踊りや、他の種類の民俗舞踊と芸能の身体動作のかたちと、子細に比較すると、その共同体のなかに生きる人びとの生涯にわたる、非常に重要なものであることが理解できよう。

姫島の盆踊りはほんの1例にすぎないが、日本の民俗舞踊、民俗芸能のなかに伝承されている身体動作のかたちの考察からは、日本人、いや人間にとっての、生涯と舞踊、あるいは生涯と芸能との関わり、意味を読みとることができるのではないだろうか。

*この原稿は、このたび、吉川周平が新たに作成したものです。

*1988年度春季第25回舞踊学会